

額田王の一二三番歌と華山畿の「松上蘿」

——題詞の「蘿生松柯」が意味するもの——

月 野 文 子

一、はじめに

『万葉集』巻二の相聞部には弓削皇子と額田王の歌があり、さらにその後には額田王の歌一首が置かれている。この三首の関連、また、三首目の題詞「折^ニ取蘿生松柯^一」の意味するところについて、従来説では解決しきれなかった点に、いささかの考察を加えてみたいと思う。まず、当該歌三首を掲げる。

幸^ニ于吉野宮^一時、弓削皇子額田王贈与歌一首

A 古に恋ふる鳥かもゆづる葉の御井の上より鳴き渡り行く（巻2・一一一）

額田王奉^レ和歌一首 従^ニ倭京^一進入

B 古に恋ふらむ鳥は霍公鳥^{ほととぎす}けだしや鳴きし我が思へること（カ・一二二）

額田王の一二三番歌と華山畿の「松上蘿」

從^ニ吉野^一折^ニ取^ニ蘿生松柯^一遣時、額田王奉^レ入歌一首

C み吉野の玉松が枝は愛^はしきかも君が御言を持ちて通はく（「」・一一三）

Aの弓削皇子の歌とBの額田王の歌についての先行研究は少なからずあるが、その考察は、A B歌の「いにしへに恋ふ」を作者自身の実感をともなった〈懷旧〉と捉え、その対象となる時代は何時か、また、その心情は如何なるものであるか、という点に向けられていたように思われる。

AとBについて先行研究の導き出した結論は、〈弓削皇子にとっては父、額田王にとっては夫であった天武天皇を思慕して時流の移り変りを嘆く〉歌というものであった。A B両歌の主題とされてきた〈懷旧〉に具体性を求めようとする場合、弓削皇子と額田王が恋うべき共通の「いにしへ」は天武天皇の時代以外にはありえないからである。また、北村季吟の『万葉拾穂抄』など、古くからこの歌が蜀魂伝説（蜀王杜宇の故事）を踏まえているとするものがあり、近年の註釈も多くがこれにもとづいている。しかし、天武天皇の昔に思いを寄せるのに、何故、蜀王杜宇を持ち出す必要があるのか、これらの説がその理由を明確にしているわけではない。中国では望郷と懷古の悲鳥とされるホトトギスにまつわる蜀魂伝説は、〈不徳を恥じて国を去り、望郷の鳥〓杜鵑と化した蜀王^{〔注〕}〉の話である。B歌に「霍公鳥^{〔ほくとぎす〕}」が詠み込まれており、「いにしへに恋ふ」としているからといって、天武天皇と單純に結びつくものではない。壬申乱後の新体制を築いた英雄であり、父である天武天皇を懷かしむのに、不吉かつ不名誉な蜀王杜宇の故事を下敷きにしたとする説は、説得力を持たない。

それ故、稿者は、年若い（詠作時十代後半と推定される）弓削皇子の歌に実感を伴うほどの「懷旧の情」を見て取ることに疑問をもち、A Bが万葉の霍公鳥詠に多くみられる言語遊戲的な〈聞きなし〉の表現にあることを述べたのであるが、本稿では、それを踏まえて、さらにその後には置かれたC歌とその題詞の意味するところを探っていく。^{〔注〕}
なお、従来説はA、B、Cを一連のもの（同一機会に詠まれたもの）と捉えており、A Bのやり取りを踏まえて、C題詞の行為「折取蘿生松柯遣」がなされたときとみている。三首を一連のものと仮定した場合、C題詞にみえる松枝

の送り主は弓削皇子となり、額田王のC歌も弓削皇子に向けて発せられたことになる。

二、C歌題詞の役割と吉野行幸

諸注釈は、前に置かれたAの贈歌が吉野で詠まれており、C歌の題詞にもまた、「吉野より」とあることから、「折取蘿生松柯遣」（柯＝枝）という行為は弓削皇子によるものという解釈で落ち着いているが、C歌に対する考察はA Bに比べて手薄であり、また、題詩と歌との関係について詳しく検討したものはほとんどないと言つてよいだろう。三首の関係を読み解く際に、C題詞が手掛かりとなることは言うまでもないが、従来説はA BとCをつなげるものも〈懐旧〉であるとみている。つまり、吉野からもたらされた「蘿生松柯」がそれを表すものであることを前提として、先行研究は組み立てられているのである。本稿は、三首を一連のものとする点においては従来説と同じであるが、これらとは別の視点から三首の関係を捉えてみたい。

まず、従来説を確認しておこう。このA B二首は、その題詞によつて贈歌とそれに和した歌であることが明らかであるばかりでなく、歌の内容においても「古に恋ふる鳥」という語が共通のキーワードとして指摘できるわけだが、この「古」については、はやく契沖の『萬葉代匠記』が「昔父帝ノ行幸シ給ヒシ時、御供ニ侍シ事ヲ、今モ持統天皇ノ行幸ノ御供ニ有テ懸思召ス御心ヨリ感ヲ興シテヨマセ給ヘルナルヘシ。又額田王ニ贈ラセ給フヲ以見レハ、先帝ノ行幸ノ御供ニハ額田王モ共ニ供奉セラレシニ、此度ハ京ニ留マレハ共ニ御供アリシ昔ヲ懸タマフニヤ。」と述べたのを初めとして、諸注釈書には天武天皇と関係のあることが指摘されている。

A Bの関係は動かないところであるが、Cも含めた三首が一連のものなのか、或は、Cのみ、別の機会に詠まれたものなのか、不明である。C歌には、AとBに共通する「古に恋ふ」や「鳴く鳥」を意味する語がなく、歌の内容からはA B二首との関連を説明することはできない。そこで、三首を一連のものと見做すために、C歌題詞の「吉野からもたらされた蘿生松柯」にその根拠を求めたのである。たとえば、鹿持雅澄の『萬葉集古義』は「老木の枝

には、苔のむすものなれば、年久しきにたとへたるなり」としている。つまり、「年月が経て久しい」ことの象徴として「コケが生じた松の枝」を示したとみるのである。橘守部の『万葉集檜婦手』も「蘿」字について、「こゝはたゞ常の苔なるを通はして書けるにも有るべし」としている。

しかし、「蘿」字がコケの意味で用いられ、「年月を経て久しい」ことを表しているのだとしても、それが直ちにA・B歌の「いにしへに恋ふる」（懷旧）とつながるものでもない。さらに、それがどのように額田王のC歌の「はしきかも」という表現につながると考えればよいのだろうか。従来説は、この点についての考察が完全に抜け落ちていたのである。いずれにしても、三首を一連のものとするか否かは、題詩をどう読むかにかかっている。

C歌の内容にA・B歌との関連が見られない以上、題詞は虚心にかつ丁寧に読み解かねばならない。Cの題詞に「弓削皇子」の名前が無く、「更」「又」など一連の作であることを意味する文字も無いという事実を無視することはできないだろう。先入観なしに読めば、別の吉野行幸時の歌と解釈することも可能である。C歌をA・Bと結び付けているのは「吉野」であるが、持統朝の吉野行幸は度々行われている。卷二の作品がほぼ時代順に配列されているため、持統天皇の行幸が行われた時期のものととして、隣に置かれたに過ぎないという見方も可能であろう。

題詞には、誰が「蘿生松柯」を額田王に送ったのか示されていない。題詞には省略された主語Xが、吉野から額田王のところへ「折取蘿生松柯」（蘿の生じた松の枝）を届けさせ、これに対して額田王が歌で応えたのだということ、ひとまず確認しておきたい。

では、弓削皇子がA歌を詠んだ吉野行幸は何時で、その時の弓削皇子の年齢は何歳であったのか。この点について確認しておこう。また、三首が一連のものであることを説くためには、行幸期間中に吉野と倭京の間を二往復することが可能かについても確かめておく必要がある。弓削皇子と額田王の歌のやり取りが可能なのは持統朝までである。『日本書紀』の記載によれば、持統天皇の在位中に行なわれた吉野行幸は三十一回にも及ぶのであるが、B歌で額田王がホトトギスを詠んでいることから、該当する季節によって絞ることが出来る。ホトトギスが鳴くのは立夏から小暑の頃にかけてである。『日本暦日便覧』^{〔注3〕}によって、これを確認し、その季節に行なわれた吉野行幸を抽

出すると、該当するものは次に挙げる七回である。また、B題詞下の注「倭京」が明日香の都をさす〔^{注5}『日本書紀』に五例見える「倭京」は、いずれも明日香京〕のであれば、持統八年十二月の藤原京遷都以前のこととなり、該当する行幸は更に絞られて①～⑤までの五回となる。

行幸の期日	立夏	小暑
① 持統四年五月三日～（帰京日不明）		
② 五年四月十六～二十二日		
③ 六年五月十二日～十六日	4 / 13	閏5 / 15
④ 七年五月一日～七日	3 / 24	5 / 26
⑤ 同八年四月七日～（帰京日不明）	4 / 6	6 / 7
……………（八年十二月 藤原京遷都）……………		
⑥ 同十年三月二十八日～五月四日	3 / 27	5 / 29
⑦ 同十一年四月七日～十四日	4 / 9	6 / 10

右の行幸の吉野滞在期間は、短いもので五日間、長いものは一カ月をこえる。この季節以外の吉野行幸でも、滞在期間は七日前後のことが多いので、①と⑤の帰京日不明の行幸も、その程度の日数と考えて差支えないだろう。したがって、それほど距離の離れてはいない吉野と都との間を（二七～一八kmの行程か）、吉野滞在中に使者を往復させることは①～⑦いずれの機会でも可能であった筈である。度重なる行幸に際して輿や荷車が通れるよう道路は整備されていたと思われるので、伝令用の馬を利用すれば、途中で起伏の多い山道を通ったとしても、往復に要する時間は二時間か三時間程度であろう。したがって、三首を一連のものとみるための必要条件の、〈吉野滞在中に二度の往復〉は可能である。

ところで、C歌の題詞の「遣」と「奉入」とあることも見逃してはならないだろう。A歌の題詞は「贈与」とされているのに対し、松の枝は「遣」わされたのである。弓削皇子と額田王の年齢差や立場を考えた時、「遣」の文字使いがふさわしいとは思えないのである。上代文献において、主語が省略された「遣」は、天皇（朝廷）をさす場合が殆どである。それは『万葉集』においても例外ではなく、

○和銅五年壬子夏四月遣長田王于伊勢斎宮時山辺御井作歌（卷一・八一題詞）

○勅穗積皇子遣近江志賀山寺時但馬皇女御作歌（卷二・一一五題詞）

○長田王被遣筑紫渡水島之時歌（卷三・二四五題詞）

等をその例として挙げることができる。いま、松の枝は吉野離宮から遣わされているのである。さらに、宮殿を意識した「奉入」という表記にも注意する必要があるだろう。この二つの点を考えると、額田王に吉野離宮から「羅生松柯」を遣した人物、また、額田王がC歌を奉った相手は必ずしも弓削皇子一人に限定する必要はないだろう。吉野へ行幸中の持統天皇である可能性も視野に入れた方がよさそうである。歌の遣り取りと動作主を題詞中の語句と併せて確認しておこう。

A 歌	弓削皇子（吉野離宮）	——	「贈与」	↓	額田王（倭京）	
B 歌	額田王（倭京）	——	「奉和」「進入」	↓	弓削皇子（吉野離宮）	
C 歌	羅生松柯	額田王（倭京）	——	「遣」	↓	額田王（倭京）
		額田王（倭京）	——	「奉入」	↓	額田王（倭京）

先行研究は、三首を一連のものと見做すために、C歌題詞の行為を弓削皇子のものとし、「蘿生松柯」に「年月を経て久しい」ことを読み取るうとしたわけだが、行幸中の吉野離宮（天皇を中心とした場）から遣わされたなら、必ずしもA Bのやり取りと同じテーマである必要はないのかもしれない。むしろ、二度目のやり取りは一度目のテーマと関連を持ちつつも、新たな方向性を打ち出したものと考えた方が良いのではあるまいか。

また、題詞「從吉野折取蘿生松柯遣」に橋渡しの役割を求めるのは、我々の恣意であって、本来はC歌の詠まれた状況を説明するためのコメントであることを忘れてはならないだろう。古注釈の時代には誤解があったのかもしれないが、松枝に歌を書いた文が結び付けられていたのではないことを確認しておきたい。コケの付いた松枝そのものがメッセージなのである。吉野から折り取られて遣わされた「蘿生松柯」を見た額田王は、その枝に込められたメッセージを読み解き、相手を意識したが故に、ありきたりな「小松が末」などとせず、「玉松が枝」と美称を以て表現し、また、「はしきかも」とうたったのである。「愛し」は、いとおしい、かわいらしい意で讚美の気持ちを伴う語である。松の枝に込められたメッセージの意味を理解した上で「はしきかも」とうたったのだ。額田王にとって、微笑ましさや喜びをもたらす役割を果たしたと解釈をせねばならない。

このことを記録に留めた当時の人々の興味関心は、額田王が〈言葉無きメッセージ〉を如何に読み解いたか、にあったはずである。それはA Bの受け答えについてもいえることであろう。それならば、AとBの歌のありようを再確認することが、C歌とその題詞理解への近道であろう。

三、弓削皇子が「いにしへに恋ふる鳥」と詠んだ意図

〈懷旧〉ということを考える場合には詠作時の年齢や経歴が重要となると思われるので確認しておこう。弓削皇子は天武天皇の第六皇子で、母は大江皇女である。『続日本紀』によれば、弓削皇子の薨去は文武三年（六九九）七月であるが、この薨去記事に享年は記されていない。出生年不明の弓削皇子の年齢を推定する資料として取り上げら

れるのが『日本書紀』持統七年一月二日条の「浄広貳を皇子長と皇子弓削に授く」である。これを初叙位と考え、この年に皇子が二十一歳を迎えるため、正月の叙位で浄広貳（皇族の位階十二階のうちの八番目にあたる）を授けたとみるのである。これによつて逆算すると、弓削皇子が生まれたのは天武二年（六七三）のこととなる。

ところで、初叙位は通常ならば、かぞえ二十一歳であり、昇叙はしばらく後のことになるはずである。『日本書紀』によれば、他の兄弟たち（大津、長、新田部、穗積、舎人）も浄広貳からのスタートだったとみられる。弓削皇子が当該歌を詠んだのが、前掲のいずれの行幸だったとしても、己れの身分や処遇について深刻に受け止め得る年齢ではないというのが、ほんとうのところであろう。

持統四年か五年の行幸なら、弓削皇子は十代後半であり、軽皇子（のちの文武天皇）は未だ八歳か九歳である。それにも拘わらず、弓削皇子の歌に〈懷旧〉や〈時流の嘆き〉を読み取るのは、穿ち過ぎではあるまいか。ちなみに、諸説にあてはめて当該歌が詠まれた時点の弓削皇子の年齢を推測してみると、山田孝雄『万葉集講義』等の持統四年（六九〇）もしくは五年とする説をとれば、かぞえ十八歳か十九歳ということになり、身崎壽の持統七年説^{〔註6〕}では数え年で二十一歳となる。もっとも遅い川上富吉説の持統十一年^{〔註7〕}は、「倭京」が明日香京をさすのであれば、除外されることになる。

なお、この時点で皇位継承に優位といえる皇女腹の天武天皇の皇子は、弓削皇子を含めて三人だけである。草壁皇子亡き後、皇位は軽皇子へという意思が持統天皇にあったとしても、言われるような哀愁や運命を弓削皇子自身が自覚していたかどうかは甚だ疑問である。

既に別稿で指摘したことが^{〔註8〕}、弓削皇子と額田王の贈答に〈懷旧〉を結びつけた先行研究の問題点は、万葉集中の多くの霍公鳥詠の実際と切り離して当該歌を考察してきたことであつた。それ故に、「いにしへに恋ふ」の表現が実感を伴うとみることに抵抗がなかったのである。六十歳前後と推定される額田王には懷旧ということもあり得ようが、歌を投げ掛けたのは弓削皇子の方であつて、額田王はそれを受けて和したに過ぎない。とすれば、弓削皇子

の歌からこそ考察はなされなければならないだろう。

弓削皇子が未だ〈懷旧〉を実感できない年齢だったとすれば、歌の解釈、とくに懷旧についても一度考え直すことが必要である。三つの歌を直訳しておく。

【A歌】 昔のことを恋しく思う鳥なのだなあ。ユズリハの御井の上を鳴きながら飛んで行く。

【B歌】 昔のことを恋しく思う鳥というのは霍公鳥ですね。おそらく鳴いたでしょう。私が思っているのと同じように。

【C歌】 吉野の玉松の枝はまあ愛しいこと。わが君のお言葉を持ってきたとは。

従来説は、「いにしへに恋ふ」「ほととぎす」とあることから、単純に懷旧之歌と決めつけ、そこに作者の悲劇的な人生を見ようとしたのである。しかし、A歌の方は敢えて、鳥の名を出さず、「いにしへ」「恋う」「ユズリハ」「鳴き渡る」など、思わせぶりの語句を使用して一首をまとめている。これに対して、額田王のB歌は、その鳥を「ほととぎす」と断定し、その鳥はたぶん私の思っているのと同じように鳴いたと推測してみせる。つまり、ホトトギスが「自分の思い」を代弁している、というのである。このやりとりは、天平期によくみられるホトトギス詠と変わらないように思われる。

イ 暇なみ来まさぬ君に霍公鳥吾れかく恋ふと往きて告げこそ (卷8・一四九八)

ロ こと繁み君は来まざず霍公鳥汝だに來鳴け朝戸開かむ (〃・一四九九)

ハ 霍公鳥鳴きしすなはち君が家にゆけと追ひしは至りけむかも (〃・一五〇五)

ニ ふるさとの奈良思の岡の霍公鳥言告げ遣りし何如に告げきや (〃・一五〇六)

などが例として挙げられる。これらは、相手のところへ飛んで行って「鳴く」ことが表現の基本となっている。イ「往きて告げこそ」、ニ「言告げやりし」など、霍公鳥は伝言の役割を果たす鳥として詠まれる。伝言の内容はイのように「かく恋う」(カッコウ)である。つまり、霍公鳥は歌い手の心情の理解者であり、代弁者でもあるのだ。この場合、霍公鳥が実際にそこに存在するか否かは問題とはされない。霍公鳥の鳴く季節であればよいのである。

万葉集の霍公鳥詠の特徴は、先行説がとくような漢文学の望郷の鳥ではなく、「伝言を託す鳥」として表現されることである。万葉の霍公鳥詠が明るく感じられる所以である。それは雑歌でも相聞歌でも同じである。

弓削皇子は「鳴き渡り行く」としたが、もし、A Bに〈伝言の鳥〉の原型をみることが許されるならば、弓削皇子の歌は「古を恋しく思う鳥は何？」という謎かけをしたことになり、額田王の答えは「古を恋しく思う鳥は霍公鳥ですね」である。伝言の鳥ゆえに額田王も「鳴く」ことを詠み込んだのである。ただし、万葉の「霍公鳥」はカッコウとホトトギスを包括することに注意しておきたい。カッコウではなくホトトギスの聞きなしの例としては、次の東歌があげられよう。

ホ 信濃なるすがの荒野にほととぎす鳴く声聞けば時過ぎにけり（巻14・三三五二）

こちらはホトトギスの鳴き声そのままに「時過ぎ」にけり、と聞きなしたものだろう。前掲のハなども「ときすぎにけり」（約束の日は過ぎてしまった）と解釈した方がよいのかもしれない。「時過ぎにけり」と聞くことのできる霍公鳥だからこそ、時代が降ると「懐旧」の鳥と理解されるに至ったのだらう。

なお、弓削皇子と額田王の歌の「いにしへに恋ふ」も、「恋ふる」に重点をおいて捉えれば、「斯く恋ふ」（カッコウ）と解することは可能である。しかし、「いにしへ」に重点を置くならば、「時過ぎにけり」（ホトトギス）ということになるのだらう。額田王の「吾が思へること」はどちらにも解釈できるわけである。ここが彼女の才智なのである。武田祐吉の『万葉集註釈』が額田王の当該歌を「理智の方面のみ残った才媛の晩年」であって魅力を感じられないとしたのは、言葉遊び的なものを敏感に嗅ぎとっていたのかもしれない。

四、万葉歌の「羅」と漢詩文の「女羅」

すでに述べたように、A Bのやりとりは謎かけとその解答であったと考えられる。その後になされたCも含めた三首を一連の作と見做すのであれば、当然、C歌題詞の吉野から遣わされた「羅生松柯」も謎かけで、C歌がその

答えである可能性を考えてみる必要があるだろう。

では、そのように見做すためには、C歌とその題詞をどのように解釈すればよいのであろうか。先にも触れたが、『古義』や『檜婦手』は、C題詞を「いにしへ」と結びつけようとして「コケの生えた松」と解釈したのである。おそらく『和名抄』の「萬豆乃古介^{まづのこけ}」を参考にしたものであろうが、『万葉集』において松と蘿が共に表現されている歌は、卷二の二二八番歌のみである。たしかに、集中の用例を確認してみると、「蘿」字をコケの意味で使用しているものがあり、「蘿生」を『古義』が指摘するように「年月を経て久しい」ことの謂として弓削皇子と額田王の歌の「いにしへ」と関連づけることは可能であるが、「恋ふ」には結びつかないのである。集中の用例を確認してみると、「蘿」は十二例拾うことができる。

- ① 從吉野折取蘿生松柯遣時、(卷2当該歌の題詞)
 - ② 妹が名は千代に流れむ姫島の小松が末に蘿生すまでに(卷2・二二八)
 - ③ 松掛羅而傾蓋(卷5の梅花三十二首并序)
 - ④ 奥山の岩に蘿生し畏くも問ひたまふかも思ひあへなくに(卷6・九六二)
 - ⑤ 詠蘿(卷7の雑歌の分類項目)
 - ⑥ み吉野の青根が嶺の蘿蓆誰か織れけむ経緯なしに(卷7・一二二〇)
 - ⑦ 足代へ行く小為手の山の真木の葉も久しく見ねば蘿生しにたり(卷7・一二二四)
 - ⑧ 奥山の岩に蘿生し畏みと思ふ心をいかにかもせむ(卷7・一三三四)
 - ⑨ 結へる紐解かむ日遠みしきたへの我が木枕は蘿生しにけり(卷11・二六三〇)
 - ⑩ 我妹子に逢はず久しもうましもの阿倍橘の蘿生すまでに(卷11・二七五〇)
 - ⑪ ……飛鳥の川の水脈を早み生したため難き石枕蘿生すまでに…(卷13・三二二七)
 - ⑫ 神奈備の三諸の山に斎ふ杉思ひ過ぎめや蘿生すまでに(卷13・三三二八)
- 右のうち、三例(①③⑤)は漢文体表記の題詞と序文および分類項目語であり、それ以外の九例が歌の表現である。

我々はつい、国歌「君が代」の歌詞によつて、〈苔むす〉ことに永遠性に対する賛美や寿歌的な要素を連想してしまいがちであるが、右に掲げた歌の内容を詳細に確認してみると、万葉の「蘿」のイメージは必ずしも額田王のC歌の「はしきかも」に結び付けられるものではないようである。

前掲歌のうち、②⑦⑫の三首において「蘿」と「小松が末」「真木の葉」「斎ふ杉」が一緒に詠まれており、C歌題詞の「蘿生松柯」にイメージが近いように見受けられる。しかし、②は挽歌で、その題詞に「和銅四年歲次辛亥河辺宮人姫島松原見嬢子屍悲嘆作歌二首」とあるうちの一首目であり、二首目に「沈みにし妹が姿を見まく苦しも」とあることから、溺死した嬢子の屍を見て、その靈魂を慰めるためにうたったものである。

④⑧の「蘿生」は「奥山の岩に蘿生し」としており、「かしこし」を導くための序詞的用法であり、謂わんとするところは〈畏敬の念を以て遠ざかっている〉ことである。さらに、⑨⑩は疎遠になった男女の歌で、逢わなくなつてから月日が経過してしまったことを表現しており、二人の関係が過去のものとなった証が「蘿生」なのである。しかも⑩の場合は柑橘類によく生じる青カビのようである。

すると、「蘿生」は、時の経過を表現する一方で、〈忌避感〉や心理的な〈距離感〉もイメージするものであることがわかる。したがって、コケを時間の経過の象徴ととらえて、AB歌の「いにしへ」と関連づけることは可能かもしれないが、この場合、松の枝の送り主は額田王に何を伝えたかったのか解らなくなってしまう。「年寄つてしまいましたね」でもなからう。時間の経過を言うのであれば、相手の「長寿」を祝うものでなければ失礼である。少なくとも、前掲の歌の例を見るかぎり、「蘿」から寿歌的な要素を読み取るには無理がある。

既に述べたとおり、AB歌のホトトギスが言葉遊びで、「いにしへ」にさほど深い意味がないなら、無理に「蘿生」に「年月を経て久しい」ことを読み取る必要はないのではあるまいか。

『倭名抄』には「蘿、女蘿也。雑要決云、松蘿一名女蘿」とあるにもかかわらず、従来説は「比加介、萬豆乃古介一云佐流乎加世」の注記の方を重視してきた。これは主に歌表現から導き出された説明である。『倭名抄』の本文は「蘿」を女蘿、松蘿としているのである。

上代人がよく利用したとされる『芸文類聚』^{〔注〕}を繙いてみると、項目としては「蘿」ではなく、「女蘿」で立てられている。女蘿ならば苔の類ではあり得ない。そこには、

広雅曰、女蘿、松蘿也。免絲也。毛詩曰、葛与女蘿、施于松上。

と説明があり、その後に詩二首を載せている。王融（齊）の「詠女蘿」詩には「…蔓衍旁松枝…因風卷復垂」とあり、劉刪（陳）の「賦松上輕蘿」詩でも「條依百尺枝、属与松風動、時將薜影垂…」とある。つまり、漢文学の世界では、「蘿」は蔓植物を指しているものだと思われる。また、『詩経』（毛詩）の小雅「頍弁」をはじめとして、「松に蘿」の組み合わせは定型化していたもののようである。

なお、身崎壽は、漢籍では蘿が他の樹木にまわりつくさまを表現するところから、C題詞は、女性が男性にすがりつくさまを連想させるものであることを述べた上で、「一一三番歌の「君」は弓削皇子でありつつ同時に天武天皇でもある、つまり額田王は弓削皇子というまたとない協力者、理解者をえて、わかき皇子にありしひの天武のおもかげをかさねてその「君」との贈答をこころゆくまでのしんでいるようにおもわれるのだ^{〔注〕}。」としているのが、「蘿」をコケではなく、蔓植物として解釈しているのが注目される。

ともかく、漢詩文の用例を見れば、C歌題詞にみえる「蘿」は、「蔓」性植物の意味に解釈することができるわけである。漢籍の知識では「薜蘿」の熟語にみるように蔓性の植物をさす場合が圧倒的に多いのである。たとえば、万葉歌と制作年代に近い『懷風藻』中の作品にその例を求めると、

○飛文山水地 命爵薜蘿中（31「遊吉野」藤原不比等）

○石壁蘿衣猶自短 山扉松蓋埋然長（90「左僕射長王宅宴」藤原宇合）

○結蘿為垂幕 枕石臥巖中（104「初春在竹溪山寺於長王宅宴追致辭」釈道慈）

など明らかに蔓性の植物として表現されている。「蘿」字をコケの意味で使用したものは『懷風藻』には無く、「蘿」「薜」「葛」など蔓植物は、山中の隠者や神仙の住まい等、特別な雰囲気醸し出すための小道具として描かれる。これらの表現は、中国六朝時代以来の遊仙文学の風景描写のなかで発達したものである。そのことを意識して、先に引用した万葉歌をもう一度見てみると、②⑦⑫の三首は、蔓性の植物であつてもよいように思われる。なお、「蘿生」の「生」字ゆえに、コケの類でない具合が悪いと考える向きもあるかもしれないので、念のため記しておくが、『詩経』の注釈は「葛与女蘿、施于松柏」と説明していることも加えておく。

さて、『芸文類聚』が「毛詩曰」として引用する「葛与女蘿、施于松上」の二句は、小雅「頍弁」の一節である。該当部分についての『詩経』の注釈には、

寄生与兔絲、延展蔓生於松柏、有相附之理也、兄弟亦然、故未見兄弟、憂心奕奕

とある。葛も女蘿も蔓性の植物であり、それが蔓延して松や柏に寄り添うさまが、兄弟親族が集まって寄り添い相親しむさまと同じであるという。「頍弁」の該当部分を引用しておく。

葛与女蘿、施于松柏。

未見君子、憂心奕奕。

既見君子、庶幾說懌。

……（略）……

葛与女蘿、施于松上。

未見君子、憂心炳炳。

既見君子、庶幾說懌。^{（注）}

右の部分「葛与女蘿、施于松柏」（蔓植物が常緑樹の松柏に支えられ、彩りを添えつつ共に生きるさま）は、本来

的には「妻が夫を頼る」ことの比喩であつたのかもしれないが、儒教の伝統的な解釈では、男女の恋情を描くものはすべて君臣の間柄の比喩と見做されてきた。この詩も、饗宴の際の音楽「小雅」の中に組み入れられており、親しい者が集まつて飲飲する喜びをうたうものとして説明されてきた。〈君子と呼ぶべき我が同胞に逢えないと、心が晴れない。逢えれば、喜びでいっぱいになる。〉の意で理解されてきたもので、我が国の上代人の理解も「延展蔓生於松柏、有相附之理也、兄弟亦然」に近いものであつたはずである。謂うまでもなく、『詩経』は当時の基本書籍である。なお、『万葉集』巻五の梅花宴の序文中に見える風景描写「松掛_レ羅而傾_レ蓋」も同様の意味を持つのだろう。正月に管轄下の国司らを饗宴する席であるがために、あえてこの表現を用いたのである。

五、C歌題詞「蘿生松柯」の意味するもの

さて、『和名抄』も漢詩文の表現も「蘿」はコケではなく、蔓性の植物を意味していたことが確認できたわけである。漢文表記のC歌題詞もこれである蓋然性は高い。前掲『詩経』小雅の「女蘿」と「松」をうたう「頍弁」が〈親族のことを思いやる〉と理解されていたところに注意しておきたい。吉野離宮から遣わされた「蘿生松柯」にこのことがメッセージとして込められており、それを理解した額田王が微笑んで「君が御言」が込められた松の枝を「愛し」と詠むのは当然であろう。

そもそも、額田王の評価を高めていたのは、「理知的」かつ「漢文学的素養」を下敷きにした表現であつた。その代表的なものが、巻一の「春秋判別歌」の対句表現であり、巻四（巻八に重出）の「近江の天皇を思ふ歌」であろう。そのことを考えれば、C題詞の蘿生松柯に『詩経』のことが意識されていて、人々が額田王を試そうと考えたとしても不思議ではないだろう。

ところで、右の額田王の歌が、後にあがる楽府詩の呉声曲「華山畿」二十五首のうちの一つに依拠するものであることは、既に指摘されるところである。

額田王思_二近江天皇_一作歌一首

○君待つと吾恋居れば我が屋戸の簾動かし秋の風吹く（巻四・四八八）

○夜相思、風吹窗簾動、言是所歎_{〔注12〕}来

〈夜、相ひ思ふ。風吹きて窗簾動けば、これ所歎来るかと〉

「華山畿」末尾の「所歎」は、直訳すれば〈自分が歎びとするとところのもの〉であり、恋人や夫を指す言葉である。額田王の歌の〈思う相手〉が天智天皇なのであれば、密やかな恋ということではないだろうから、鏡王女の「風をだに恋ふるは乏し」の歌と共に広く人々に知られ、賞賛された歌だったであろう。おそらく、歌ばかりでなく、その典拠についても額田王の周辺の人々は知っていた筈であろう。当時の漢籍の入手経路を考えれば、額田王が知り得る情報は、周辺の貴族や高級官僚にとつては常識に近いものであったろう。むしろ、典拠を知るが故の評価であったのかもしれない。

額田王の右の歌が楽府「華山畿」の前掲の一首を下敷きにして作られたことを確実視してよいならば、当時の人々が当該の一首のみしか知らないということは考えられない。二十五首全てか或いは何首かまとまって伝来したと考える方が自然である。実は、その隣に配されている一首に「松上蘿」がうたわれる。

○松上蘿、願君如行雲、時々見経過

〈松上の蘿。願はくは君行雲の如くに、時々見えて経_{まみ}り過_{ととお}ぎよ。〉

この詩を、C歌題詩と関連づけて考えることは、あなたがち荒唐無稽な発想でも無いだろう。右のうたも『詩経』の「葛与女蘿、施于松上。未見君子、憂心炳炳」と同様に、親しい人に「できることなら、空行く雲のように時々、顔

を見せてほしい」ことを訴えるものである。もともと、この詩の場合は、特定の人物をうたっているのであるが。但し、冒頭の「松上蘿」という端的な言い回しは、『詩経』の「頽弁」から出ているのかもしれない。

さて、最後に一連の遣り取りについて、あらためて確認しておこう。行幸に供奉して、吉野離宮でほととぎすが鳴いているのを聞いた弓削皇子が謎掛けの歌Aを詠んで額田王に贈り、其の答え歌Bが巧みであったために、天皇の御前で披露されて話題となり、天皇の命令で第二弾の謎掛けが出題され「松の枝」が遣わされたのである。これを額田王が如何に読み解くか、離宮にいる人々は皆、期待していたのだ。当時の歌のありようを考えれば、こういった歌のやり取りに個人の境遇を読み取ろうとするのは誤りである。額田王の歌についても必要以上の悲劇性を求めてはならないのは言うまでもない。巻一の「紫野行き標野行き」の歌が、秘めた恋などではなく宴席歌であったという考え方は、すでに定着しているといつてよいだろう。吉野離宮から遣わされた〈松の枝〉に額田王は「どのように過しているのか心配だ。顔をみれば安心するのに」という言葉を読み取った。その心遣いに感謝して「はしきかも」と明るく返したのである。

ただし、B歌については、藤原京遷都との関わりを視野に入れておくべきかもしれない。遷都に向けて着々と準備が進められるこの時期、明日香京で静かに余生を送っていたと思われる額田王が、時代の移り変わりをあらためて実感するようなことも少なくなかったのかもしれない。だが、その感慨を十代後半と推測される弓削皇子の歌にまで読み取ろうとするのは適切ではない。弓削皇子はあくまでも季節の鳥で謎を掛けて額田王の才知を試そうとしたのであって、それ以上のなものでもない。題詞の「蘿生松」を遣わした人物が直接意識したのは『詩経』小雅「頽弁」であつてもかまわないし、「華山畿」の「松上蘿」でも構わない。どちらも、身内的な存在である額田王の顔が見たいと願う表現だからである。

【注】

【注1】 先行研究がA B歌の発想の源とみなす〈蜀王杜宇の伝説〉は複数の文献に引用されており、『文選』の注にもみえる。文献によって多少の相違がみられるが、もとは一つのものらしく、その基本ストーリーは「蜀王となった杜宇は、治水ができなかったので、死後蘇生した竈霊を宰相とし、玉山の洪水を治めさせたが、竈霊の留守に其の妻と姦通した。杜宇は不徳を恥じて、国を竈霊に禅譲して去り、その魂がホトトギスと化した」というものである。以下、いくつか引用しておく。

○「文選」卷十五の「思玄賦」（張衡）の李善注「望帝以竈令為相、以德薄不_レ及竈令、乃委_レ国授_レ之而去」

○「文選」の左思「蜀都賦」注「昔有_二人姓杜名字_一、王_レ蜀號曰_二望帝_一、宇死俗說云宇化為_二子規_一、子規鳥名也、蜀人聞_二子規鳴_一、皆曰_二望帝也_一」

○「太平御覽」引用の『蜀王本紀』逸文「望帝不_レ能_レ治_レ水、使_二竈霊_一決_二玉山_一、民得_レ陸処、竈霊治_レ水、去後、望帝与_二其妻_一通、帝自以_二德薄不_レ如_二竈霊_一、委_レ国投_二竈霊_一而去」

【注2】 月野文子「弓削皇子と額田王の贈答歌——どのように「懷旧」を読み取るか——」（『香椎鴻』第四十七号 平成十三年十二月）

【注3】 霍公鳥の鳴き声を聞くことができるのは、現在の暦でいえば、五月上旬（立夏の頃）から七月の上旬頃までである。まさに、大伴家持が「霍公鳥者立夏之日來鳴必定」（三九八四番歌の左注）とした如くである。なお、万葉における霍公鳥は、ホトトギスとカッコウの双方をさすが、吉野山中では、どちらの鳴き声も聞くことができる。

【注4】 『日本暦日便覧』（湯浅吉美 昭和六三年十月 汲古書院）但し、掲載は持統六年以降。

【注5】 伊藤博『万葉集釈注』の指摘による。

【注6】 身竈「いにしへに恋らむ鳥はほととぎす——額田王の弓削皇子との贈答歌——」（『万葉』第百三十三号 平成元年九月）

【注7】 川上富吉「弓削皇子の歌」（『万葉集を学ぶ』第二集 昭和五十二年十二月）但し、川上説は弓削皇子の歌に不遇と懷古を読み取るべく、皇嗣問題後の持統十一年四月の吉野行幸を想定しているに過ぎず、根拠はない。

【注8】 月野前掲論文

【注9】 引用は中文出版社『芸文類聚』に拠る。

【注10】 身竈壽前掲論文。

【注11】 本文の引用は王静芝『詩経通釈』（台湾輔仁大学文学尹叢書）に拠る。

【注12】 『華山幾』の引用は『樂府詩集』（中華書局 中国古典文学基本叢書）に拠る。

なお、書き下しは月野による。

※弓削皇子の霍公鳥詠に「霍公鳥無かる国にも行きてしか其の鳴く声を聞けば苦しも」(巻8・一四六七)がある。その声を聞くと窓の苦しさが増すことを歌うものであるが、雑歌に入っていること自体、個人的なレベルの心情表現でない可能性が高い。大伴四繩の宴吟歌(巻8・一四九九、前掲のロ)と詠作事情は同じということになるだろう。